

オープン カレッジ

今年7月に開催した生活環境デザイン学科主催の特別講演会に安藤栄子氏を招き、陶磁器の大変貴重な話を聞くことができた。ヨーロッパの陶磁器の開発は、18世紀初頭から活発になる。当時、中国や日本から輸入される陶磁器が、王侯貴族に人気で「白い金」と呼ばれた時代であった。しかし、ヨーロッパは地質の違いから、白い陶磁器の生産ができず、国産化は永年の悲願であった。

学科主催の特別講演会から



安藤栄子作「凸盛り技法」

それに気付く客の喜びが想像できる。

今、ホテル業界は絵付けのない白い食器が主流となつている。理由の一つに、和・洋・中のいずれの料理にも、適用できる効率があげられる。しかし、料理と共に絵付けを楽しむといった、一流ホテルならではの文化が薄れているようにも思える。

次にイギリスでは、1799年頃にジョサイア・スポード2世が、陶土に牛の骨灰を混ぜる、ポーンチャイナの開発に成功する。日本では鳴海製陶が、1965年に困難とされたボーンチャイナの生産が縮小しているといった、皮肉な結果となつている。

白い陶磁器の 歴史と今日

⑨を招聘(しょうへい)した。しかし、その製造法を守秘のために、ベドガーをアルブレヒト城に幽閉し



生活科学部 生活環境デザイン学科教授
檀山女学園 大学 生活科学部 生活環境デザイン学科教授

滝本 成人

ーンチャイナの量産化に成功する。のちに安藤氏はここで、日本を代表するホテル・レストランの陶磁器デザインを担当する。そこには調理人との意見調整はもちろんのこと、インテリアのデザインモチーフを図柄に取り入れるなど、クラッシック・モダン・カシユアルなど、幅広い業績を残している。中にはポーター幅7の図柄に「波やカモメ」を入れるこだわりもあり、

「群鶏図」などを、凸盛り技法で再現した作品もあった(写真)。伝統技術の継承とその展開として、今後の凸盛り技法の発展を大いに期待している。

講演の中で、安藤氏より「陶磁器の歴史や製作者の技術や工夫に思いを巡らせ楽しむ」といった発言が、強く印象に残っている。この日の多くの受講生が、陶磁器への眼差しが替わったことを確信している。

一方、安藤氏は名古屋絵付け、凸盛り技法の継承活動にも取り組んでいる。その作品群は今年1月に、愛知県陶磁美術館で拝見することができた。伊藤若冲の「群鶏図」などを、凸盛り技法で再現した作品もあった(写真)。伝統技術の継承とその展開として、今後の凸盛り技法の発展を大いに期待している。

たきもと・なりひと 工業デザイン。名古屋工業大学大学院 博士後期課程社会学専攻修了。博士(工学)。